九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[008]ポリモルフィア表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/7347997

出版情報：ポリモルフィア. 8, 2023-03-24. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

2021年度ジェンダー研究に取り組む学生への研究助成プログラム
採択研究要旨

「筋肉的キリスト教 Muscular Christianity」とパブリックスクール ―19世紀英国ジェントルマン概念の形成―

松本　大輝
文学部　4年

1. 課題

本稿はスポーツマンシップの原型たる19世紀英国のジェントルマン概念の形成について、キリスト教的信念に自己犠牲や忠誠心といった中世の騎士道的資質を合わせた「筋肉的キリスト教 Muscular Christianity」という理念とその醸成の場であったパブリックスクール（以下､PSと略記）の関係性から検討するものである。先行研究では、PSの現場教師の視点の欠落や史料の偏りが見られ、それらを補うように分析をすることでジェントルマン階級にとって重要な教育機関であるPSという環境をより多角的に捉えることが可能だと考える。

2. 研究方法

本稿では、「筋肉的キリスト教」の性格や概念的位置を明確にした上で、当時のPSの様子を描いた小説や風刺画、PS教育の実態を初めて国家が正式に調査した1861年のクラレンドンClarendon王立委員会の報告書を用いて現場教師の観点からチームスポーツ実践や学校生活の全体像を分析し、19世紀英国ジェントルマン概念の形成とのかかわりについて検討を行う。

3. 結果と考察

多様な「男らしさ」が存在していた19世紀英国において、「筋肉的キリスト教」は人々が獲得しやすい身近な「男らしさ」として、「健康」に対する関心の高さも相まって、文学作品や活動団体などから広く伝播された。しかし、概念的にPSで最も信頼されたのはソーシャルダーウィニズムであり、「筋肉的キリスト教」は表向きの信念に留まっていた可能性が高いことが判明した。現場教師に主眼を置くと、カリキュラムをないがしろにする生徒の存在や教師間でコミュニケーションが取れない環境であったことなど、PSの内部で校長、現場教師、生徒というアクターの間で複雑性を孕んでいたことが伺え、これは近代スポーツマンシップ黎明期の段階で起きていたこととして特筆すべき点であると考えられる。

4. 主要参考文献

1. Hughes, T., *Tom Brown's School Days*, London, 1862.［トマス・ヒューズ『トム・ブラウンの学校生活（上）（下）』前川俊一訳、岩波書店、1952年］.
2. Burnand, F., ed., *Punch*, 5 October 1889 / 31 March 1894 / 31 January 1900.

3. Seaman, O., ed., *Punch*, 8 March 1911.
4. *Report of Her Majesty's Commissioners Appointed to Inquire into the Revenues and Management of Certain Colleges and Schools*, vol. 20, I, Ⅱ, London, 1864.
5. Haley, B., *The Healthy Body in Victorian Culture*, Cambridge (Mass.), 1978.
6. Mangan, J.-A., *'Manufactured' masculinity: making imperial manliness, morality and militarism*, Routledge, 2013.
7. 阿部生雄『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会、2009年。
8. 藤井泰『イギリス中等教育制度史研究』風間書房、1995年。
9. 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房、1980年。

ファンタジーRPGにおける ジェンダー・クィア・種族 ―FE『蒼炎の軌跡』、『暁の女神』分析―

照本　香奈
文学部　4年

1. 研究背景

近年、メディアにおけるジェンダー表現にますます注目が集まっている。コロナ禍での巣ごもり需要も手伝って、我々にとってより身近な存在となったゲームにおいても、それは同様である。膨大な数が存在するゲームを網羅的に研究することは難しいと考えたため、今回はファンタジーRPG『FE蒼炎の軌跡』、『FE暁の女神』という二作を分析対象とした。

2. 研究方法

任天堂から発売された、『FE蒼炎の軌跡』(2005)と『FE暁の女神』(2007)のゲームソフトと、設定資料集『テリウス・リコレクション』上下巻を対象に、ジェンダー表現に加え、クィアや種族の描き方について分析する。

3. 研究結果

まずはジェンダーの観点から分析する。キャラクターの男女比は『蒼炎の軌跡』で32対14、『暁の女神』では49対24と、どちらも男性の数が女性の二倍以上の値となった。『蒼炎の軌跡』/『暁の女神』の主人公はそれぞれ男性/女性だが、全編通して中心となるのは男性主人公である。また、男性主人公がその人柄と戦いの能力によって軍をまとめるのに対し、女性主人公はその見た目と怪我を癒す能力の神秘性などによって人心を集める。彼女の傍には常に護衛として付き従う男性がおり、男女の対照的な役割を如実に表している。

次にクィアの分析である。作中には2人の同性愛者が登場するが、どちらもステレオタイプな描き方がなされており、またキャラクターの掘り下げ自体も極端に少ないため、同性愛者に対する誤解や偏見を招く恐れがある。

最後に種族に関する分析である。二作では、種族の対立や共存が物語の根幹をなしている。歴史の改竄や隠蔽が行われ、異種族の対立が決定的なものとなっている世界で、キャラクターたちは相互の関わりを通して考えを改め、共存していくための手立てを探っていく。とりわけ酷い差別や迫害の対象となっている混血のキャラクターたち

も、その血を巡る真実が明らかにされる中で、生き方を改めていく様子が描かれている。

参考

- 『ファイアーエムブレム蒼炎の軌跡』, 任天堂, 2005.（ゲームキューブ）
- 『ファイアーエムブレム暁の女神』, 任天堂, 2007.（Wii）
- 株式会社インテリジェントシステムズ編著『ファイアーエムブレム　蒼炎の軌跡　設定資料集　テリウス・リコレクション　上』徳間書店, 2016.
- 株式会社インテリジェントシステムズ編著『ファイアーエムブレム　暁の女神　設定資料集　テリウス・リコレクション　下』徳間書店, 2016.

ドイツ「同性愛者」にとっての第一次世界大戦 ～『友情（*Die Freundschaft*）』を手がかりに～

松口　優花

人文科学府　修士課程　１年

1. 研究背景

ドイツ「同性愛者」解放運動は、ゲイ・アイデンティティの起源として評価されてきた。19/20世紀転換期にはじまるこの運動は、二つの潮流を中心に興隆し、第一次世界大戦（以下、大戦と略記）という空白期を経て、ヴァイマル期にさらなる運動を展開したと言われる。これらの研究では、ヴァイマル期における大戦経験の影響に着目する、近年のドイツ近現代史の成果が十分に反映されていない。そこで、本研究では、ヴァイマル期における「同性愛者」の自己表象に焦点を当て、パフォーマティヴな観点から分析を試みることで、大戦経験を通じて生み出された「同性愛者」表象の多様性を示すとともに、ヴァイマル初期に見られた「同性愛者」アイデンティティ形成の一端を捉えることを目的とした。

2. 研究方法

史料は、ヴァイマル期で最も著名な「同性愛者」向け雑誌『友情（Die Freundschaft）』（1919-1927）を用いる。この雑誌は、万人と言われる幅広い読者層の獲得に成功したとされ「同性愛者」の中心的なメディアであった。そこで『友情』のヴァイマル初期の言説に着目し、① 彼らの戦争と共和国への評価、②「闘い」に付随する「同性愛者」表象、について分析を試みた。

3. 分析結果

『友情』誌における大戦について、彼らは、共和国――平和と民主主義――への期待を、「同性愛者」権利向上への期待と連動させていた。つまり大戦（Krieg）と解放運動（Bewegung）を「闘い（Kampf）」という位相に位置付け対比させることで解放運動を正当化した。さらに、「同性愛者」表象については、「戦士（Kämpfer）」イメージが利用された。「大戦」と「解放運動」を、上述した「闘い（Kampf）」という言葉を用いて比較し、解放運動を正当化しつつも、両者は一貫して「戦士」としての「同性愛者」であった。また、「同性愛者」自己表象の変化に着目すれば、それは、

ヒルシュフェルト派とブラント派の主張が共存しており、その媒介項として、「戦士」「犠牲者」「国民」といったイメージが機能していた。

従来研究では、解放運動にはヒルシュフェルト派とブラント派という二つの潮流があり、大戦前から大戦後、そしてヴァイマル末期へと連続しているとみられていた。とりわけ後者は、青年同盟などの文脈と重なり合いながら、ヴァイマル末期の「男らしさ」へと向かっていったと言われる。しかしながら、本稿の分析から、少なくともヴァイマル初期には両者の表象は併存していたことが明らかになった。そこには、ヒルシュフェルト派に見られるような、国際的で平和的な、ないしはさらに先駆的な「同性愛者」アイデンティティという、オルタナティブな像が存在した可能性が示されているといえよう。

主要参考文献

Die Freundschaft

Beachy, Robert（2015）: *Gay Berlin. Birthplace of a Modern Identity*, New York. Steakley, James D.（1975）: *The Homosexual Emancipation Movement in Germany,* New York.

Crounthamel, Jason（2014）: „Deutsche Soldaten und ‚Männlichkeit' im Ersten Weltkrieg", in: *Aus Politik und Zeitgeschichte* 64, H. 16-17, S. 39-46.

Micheler, Stefan（2008）: „Zeitschriften, Verbände und Lokale gleichgeschlechtlich begehrender Menschen in der Weimarer Republik", in: http://www.stefanmicheler.de/wissenschaft/stm_zvlggbm.pdf（accessed Nov. 8, 2020）

腐女子のフェミニズム

深水　文乃

人間環境学府　修士課程1年

1. はじめに

腐女子とは、男性同士の同性愛関係を主題とする女性作者による作品（ボーイズラブ）を愛好する女性のことを指す。腐女子についてはこれまで多くの研究がなされてきたが、例えば彼女たちがなぜボーイズラブという表現技法を選んだのかというテーマに終始し、ボーイズラブによって彼女たちが何を表現しようとしているのかということはほとんど明らかにされてこなかった。腐女子がボーイズラブという表現方法によって何を表現し、何を得たのか。そして腐女子の営為は女性が性愛を語っていく上でどのような役割を持つことができるのかを明らかにしていきたい。

2. 調査方法

特に積極的に腐女子として活動しているであろうと考えられる10代から20代の未婚の腐女子女性を対象にインタビュー調査を行う。

3. 今後の予定

今年度は主に先行研究の精読と問題意識の整理を行った。この春から夏にかけてインタビュー調査を行い、夏以降は修士論文の執筆に入っていく予定である。

主要参考文献

上野千鶴子（1998）「ジェンダーレス・ワールドの〈愛〉の実験――少年愛マンガをめぐって」『発情装置：エロスのシナリオ』筑摩書房

石田美紀（2020）「少年愛と耽美の誕生　1970年代の雑誌メディア」堀あきこ、守如子編著『BLの教科書』有斐閣、57-70

北村夏美（2010）「腐女子を潜在化させるものは何か　オタク集団内のホモソーシャリティからみる彼女たちの規範」『女性学年報』31:32-55

金井淑子（2008）「フェミニズムと身体論　リブからやおいへ」金井淑子編著『身体とアイデンティティ・トラブル　ジェンダー／セックスの二元論を超えて』明石書店、19-48

霜村史織（2006）「女性向け二次創作に見られる自己表現」『女性学年報』27

堀あきこ、守如子（2020）「BLの浸透と深化、拡大と多様化　2000年代～2010年代」堀あきこ、守如子編著『BLの教科書』有斐閣、57-70

日本における LGBT 労働判例と法規制の可能性に関する検討

閻　浩

法学府　修士課程一年

1. 研究背景

ＬＧＢＴ問題は、世界中に注目を集めている現在、日本も同様に、当該問題が様々な分野において、研究が進められているが、法律の場面において、進展しているとは言い難い。特に、労働法の領域では、LGBTに関する研究が日本の最初LGBTとかかわる事例―――S社（性同一性障害者懲戒解雇）事件（東京地決 平 14・6・20 労働判例 830 号 13 頁）から始まったが、LGBT労働者に対する労働法の法規制が成立することがなく、停滞の状況である。そこで、本研究は、ＬＧＢＴ労働者が職場で直面している問題に対して、今までの判決を踏まえた上で、ＬＧＢＴ労働者問題に関する法規制の可能性を検討していく。

2. 研究方法

今まで多くの研究は判決との関連性が薄く、他国からの示唆を求めることが多いが、日本にそのまま適用することが困難である。そこで、本研究は、先行研究を踏まえ、今まで行った判例を取り上げ、現行法上の法理論に従って、実現可能のある法規制を検討し、LGBT労働者が直面している問題を個々に解決することを目的として考察する。また、文献研究以外、ＬＧＢＴ当事者と当面に交流することにより、当事者の感覚をつかむことも研究の一環である。

3. 分析結果

今までの判決を分析したことにより、ＬＧＢＴ労働者に関する紛争の解決は、既存の労働法理論に従って、判断を行っていることや、ＬＧＢＴ労働者に対して、配慮の必要性があることが分かった。さらに、判決で触れていない問題に対して、既存の労働法理論に基づき、ＬＧＢＴ労働者が職場における法的保護やかかる問題をどのように解決していくのかを考察していた。

主要参考文献：

三成美保編著『ＬＧＢＴＩの雇用と労働―当事者の困難とその解決方法を考える』（晃洋書房、2019）

野田 進 山下 昇（編）柳澤 武『判例労働法入門』（有斐閣、第 7 版、2021年）

大内伸哉『最新重要判例200労働法』（弘文堂、第6版、2020年）

菅野和夫『労働法』（弘文堂、第12版、2019）

シェイクスピア劇ジェンダー構造のインターテクスチュアリティ～オフィーリアとガートルード～

譚　曇

芸術工学府　修士課程１年

1. 研究背景

シェイクスピア劇の女性キャラクターは注目されてきたが、先行研究では、彼女たちを孤立したキャラクターとみなし、一人の女性キャラクターを独自に研究することが多かった。しかし、同じシナリオの中で、彼女たちの社会環境は同じだが、性格や行動は違う。例えば、オフェリアとガートルードの共通点は、私たちが見過ごしがちなことでもある。姉妹であるキャタリーナとビアンカも、もちろん深いつながりを持っていて、彼女たちに起こった変化の一部は、お互いに起因している。

この研究では、彼女たちを孤立した個人として見るのではなく、インターテクスチュアリティ理論を用い、同じシナリオの中の彼女たちの間の深いつながりを探り、彼女たちのキャラクターの性格特徴と心理的変化をジェンダー理論で分析する。シェイクスピアの原作を具体的に分析しながら、舞台公演の実例を交えて、彼女たちが置かれた家父長制の社会環境が彼女たちに与える影響と彼女たちの相対的な反応を分析し、できるだけ彼女たちの人物像を完璧にする。

2. 研究方法

主に、文献研究、記述性研究、ケーススタディ、舞台映像比較分析の四つの方法で研究する。シェイクスピア作品の原作を繰り返し読んだ上で、CiNii Article、中国知網、百度学術等のウェブサイト及び図書館で関連資料を調べ、研究対象、ジェンダー理論及び関連研究に対する理解を深める。インターテクスチュアリティ理論を用い、オフィーリアとガートルードを比較し、原作と演劇実例を結合して彼女たちの特徴と状態の変化を分析し、家父長制という時代背景を結合し、比較することによって彼女たちの人物像を完成する。いくつかの例を通じて、シェイクスピア劇のジェンダー構造を分析する。

3. 分析結果

『ハムレット』の舞台と映画の女性キャラクターの演出には、定番がある。オフィーリアの純潔さは彼女の白いドレスで表現され、ガートルードの寝室のベッドは彼女の欲望やハムレットのエディプスコンプレックスを暗示する。近年、ジェンダー問題も取れ上げられた。例えば、2018年盧芳は衣装と声が変わらない形でガートルードとオフィーリアを同時に演じた。2018年の映画はオフィーリアの視点で展開し、彼女の結末を改編し、新しいキャラクターを増やし、ジェンダー問題を

強調した。舞台演出には、古典的なバージョンと現代的なバージョン両方があった。欧米映画は古典的なイメージで、舞台で演出できない場面も撮影できる。

『ハムレット』は王室の物語だが、シェイクスピアは人間の共通問題を考えた。女性たちは男性たちに利用され、権力闘争の犠牲者として、人生は悲劇になる。家父長制のしたで、王妃としてのガートルードや大臣の娘としての純潔なオフィーリアも、死亡の運命に逃れない。

主要参考文献

[1] 边丽君. 莎士比亚喜剧中的女性地位探讨 [J]. 河南财政税务高等专科学校学报, 2020, 34 (06):89-91.

[2] 阮世勤. 博弈与规训:莎士比亚《驯悍记》的性别形象建构研究 [J]. 广东石油化工学院学报, 2020, 30 (02):57-60.

[3] 张新宇. 解读莎士比亚作品对女性人物的刻画 [J]. 短篇小说（原创版), 2013 (36):5-6.

[4] 徐佳威.从女性主义文学批评角度看莎翁笔下的女角 [J]. 太原大学教育学院学报, 2015, 33 (02):22-25.

[5]『十二夜』における異性装とジェンダー. 神山高行. 東海大学短期大学紀要第43号 (2009).

[6]『じゃじゃ馬ならし』と父権制. 松本一喜.

DV 被害者のエンパワメントと社会的認知を目指すアートプロジェクト

MI SHASHA

芸術工学府　修士課程１年

1. はじめに

近年、ＤＶは社会問題になっている。中でも、女性の被害が深刻である。被害者は心身に深くダメージを受けるが、性に対するタブーがある上、親密関係は排他的関係と見なされる傾向があるため、ＤＶは認識・表現されにくく、ＤＶの発見も困難になっている。したがって、ＤＶでは、女性被害者たちの精神的な自立の支援と同時に、DVにおける女性への暴力を単に「個人の問題」ではなく、人権問題・社会問題として認識されるようになることが重要な課題である。

本研究の目的は、アートを通して、当事者本人へのケアと当事者の周囲をめぐるケアのネットワークを構築する可能性を検討することである。ここでの「周囲」とは、当事者の家族や友人、カウンセラー、弁護士など、当事者と直接かかわり、本人への支援になれる立場の人たちである。

2. 予備調査の結果

今年度は予備調査を通してDVの全体像を把握し、具体的な問題点とアートによって解決可能な点を明確した。

3. 研究方法

来年度には、アートベースリサーチを用いる先行研究を参考しながら、アートプロジェクトを実践するつもりである。NPO法人アコアと一緒に福岡のアート助成金を申請し、10万円の助成金

を獲得した。これからは、展示内容やオーディエンスの対象など、プロジェクトの内容を丁寧に検討し、実施する。それに踏まえて本調査を行う。対象としては、アートプロジェクトに参加してくれる自助グループの女性たちと観客を想定している。

主要な参加文献

信田さよ子（2002）「DV 人はいかにして「当事者」となるのか―家族内暴力と支配関係の中で」『世界（701）』岩波書店, 169-179

森田ゆり（2007）『ドメスティック・バイオレンス―愛が暴力に変わるとき―』小学館

Judith Lewis Herman, M.D.（1992）. Trauma and Recovery. New York: HarperCollins Press. 中井久夫訳『心的外傷と回復』（1999）みすず書房

Qingchun Wang, Sara Coemans, Richard Siegesmund, Karin Hannes.（2019）. Arts-based Methods in Socially Engaged Research Practice: A Classification Framework. Art/Research International: A Transdisciplinary Journal, 2（2）, 5-39

Hutzel, K. E, Kim, I.（2013）. Situating an Art-based Action Research Study within Social Justice Theories. Archives of Design Research, 26（2）, 35-53

合気道と女性：伝達と課題

グレイ・リリー　アラーナ

人文科学府　修士課程２年

1. 研究背景

大正時代に創始された合気道は最初から男女参加者を受け入れられた。しかし、今の合気道の情況は師匠や道場長の内で多数は男性であるという事実がある。この役割は文化伝達制度を影響に与える。女性が師匠や道場になることは珍しいのですが、次の世代への合気道の伝達にどのように関わっているのか？

2. 研究方法

地域の合気道組織で参与観察という民族的なフィールドワークをして組織の女性合気道家の面接と、さらに他の女性の道場長と参加者との面接を比べる。面接の答えをコードして、経験、指導方法、伝統などの点に特に注意しながら、解釈的な説明を作成する。

3. 分析結果

合気道伝統の影響は二つのレベルに区別ができる：マクロとミクロである。「マクロ」のレベルは合気道の世界で影響に与えている。マクロレベルでいる人達は現代の合気道のスタイルと合気道の伝統を作って、外の世界で合気道の顔にとって活動して、営業にとって合気道をしている。

「ミクロ」のレベルは道場の中で影響が一番強いである。ミクロレベルでいる人たちは技を保存または変更し、独自のフォロワーと人気を高め、新しいメンバーに道場での行動方法を教える。

合気道伝達への影響は役割によって決定され

る。合気道の世界では明確な進行構造がないため、マクロの影響力のある役割を達成することは困難である。他方では、ミクロの影響力と役割は、より簡単にアクセスでき、より多くの女性を含み、トップの役割と同様に個々の道場の成功に不可欠である。

主要参考文献

Wellard, Ian. "Gendered performances in sport: an embodied approach." *Palgrave Communications* 2（2016）. DOI: doi.org/10.1057/palcomms.2016.3.

Cavalli-Sforza, LL, Feldman MV, Chen KH, and Dornbusch, SM. 1982. "Theory and Observation in Cultural Transmission." Science 218（1）19-27

Daly, P. "Fighting Modernity: Traditional Chinese martial arts and the transmission of intangible cultural heritage." In Daly, P & Winter, T（eds）. *Routledge Handbook of Heritage in Asia*. London: Routledge, 2012.

Outside the Academy: Sinitic Education of Court Women in the Early Heian Period

Chan Yat Yi Bethany

Second-year Master's Student
International Master's Program in Japanese Humanities
Graduate School of Humanities

1. Research Background

During the early Heian period（794–909）, court women were excluded from the state academy（Daigakuryō 大学寮）because of their gender. However, there are sparse records showing their involvement in Sinitic writing. Then, how did they attain Sinitic literacy outside the state academy, and how did they utilize their Sinitic knowledge? This research aims to survey the Sinitic education of court women in the early Heian period, so as to reconsider the relation between their feminine identity, their role at court and Sinitic literacy.

2. Research Approach

The first part of this research will examine women's attainment of Sinitic knowledge and the practices of Sinitic literacy through three positions at court, namely those of female physicians, female officials and Sinitic poetesses. The second part will center on the life and achievements of Royal Princess Uchiko 有智子内親王（807–847）, who functioned in the triple roles of a Sinitic poetess, the daughter of Saga Tennō and the first high priestess（saiin 斎院）at Kamo Shrine（Kamo jinja 賀茂神社）.

3. Findings

Princess Uchiko and the three groups of court women sought their ways to attain Sinitic knowledge vis-à-vis their roles and identities at court. Female physicians, whose medical skills were valued more than language skills, were

taught via oral instruction. In contrast, female officials, who were responsible for supervision or management work, were trained to master higher level Sinitic reading and writing skills, and even thrived as Sinitic poetesses. Princess Uchiko, who had the highest status amongst them, enjoyed a favorable environment to Sinitic education due to her parents' influence, participation in poetry events, and her life of abstinence in Kamo Shrine.

Main References

Maruyama Yumiko 丸山裕美子. "Uchiko Naishinnō: Bunshō keikoku no jidai to shodai Kamosaiin" 有智子内親王：文章経国の時代と初代賀茂斎院. In *Kodaijinbutsu 4: Heian no shinkyō* 古代人物4：平安の新京, ed. Yoshikawa Shinji 吉川真司, pp. 197–220. Seibundō, 2015.

Tokoro Kyōko 所京子. "Uchiko naishinnō no shōgai to sakuhin" 有智子内親王の生涯と作品. *Shōtokugakuen Joshi Tanki Daigaku kiyō* 聖徳学園女子短期大学紀要 12 (1986), pp. 186–72.

19世紀のオスマン帝国における ハレムの女性の諸相 ―女性自身による回想録から

松下　万弥

人文科学府　修士課程２年

1. 研究背景

オスマン帝国における、ハレムは君主の私的空間であったため長い間その詳細は分かっていなかったため、情報に限りがありまた西洋のオリエンタリズムによって誤ったイメージが定着していた。本研究では未だ先行研究において詳細な分析が特にされていない19世紀～20世紀に初めて出現したハレムの住人による記録を利用することでハレムの実像を可能な限り解明することを目的とする。

2. 研究方法

具体的な史料として用いる回想録は、アブデゥルメジト1世（d.1861）の治世中にオスマン帝国の高官を務めたメフメト・エミン・パシャ（d.1871）の最初の妻であるメレク・ハヌム（d.1873）が1870年に出版した『ハレムでの30年間』、幼少期をドルマバフチェ宮殿のハレムで過ごしたトルコ人の作曲家で、作家のレイラ・サズ（d.1936）が1925年に出版した『スルタンのハレム』、またアブデゥルハミト2世（d.1918）の娘であるアイシェ皇女（d.1960）が1955年に出版した回想録、メフメト5世（d.1918）治世時に宮廷で教師を務めたサフィエ・ユニュバルが1946年に出版した『宮殿での私の記憶』の4点である。また、回想録に加えて先行研究において主要史料として使用される、首相府オスマン文書

館所蔵のハレムの女性の俸給台帳や、下賜台帳などの分析も検討している。

3. 分析結果

ハレムの女官たちは、厳重に統制され、また仕事内容にも明確に定められており、能力次第で自身の役職以上の地位と高い評価を得られた。また、ハレムの女性たちは身寄りがない者たちの集まりである分、ハレムの住人たちは互いに強力な絆やネットワークが生まれた。それは西欧諸国によってもたらされたハレムの性的で閉鎖的なイメージを覆すものである。また徹底した等級制度基づいた組織であり、服装や芸術（主に音楽）などは西洋の影響は受けるが、慣習や制度は変わらなかった。

〈一次史料〉

BA, HH.d., 716, 14162（h.1268-1272/1852-1856

Muallim Cevdet B4, Ⅱ. Mahmud Mevâcib Defteri

Bon, Otoviano- Robert Withers. 1653. A Description of the Grand Senignour's Seraglio or Turkish Emperours Court, edited by John Greaves. London.

Hierosolimitano, Domenico. 2017. Bir Yahudi Doktorun Harem, Saray ve İstanbul Hatıraları, trans. by Esma Selçuk Demir. Istanbul: Yeditepe.

D'Ohsson, M. 1787-1824. Tableau Géneral de L' Empire Ottoman. 7 vols. Paris.

〈参考文献〉

Akman, Filiz Barın.2018. Ottoman Women in the Eyes of Western Travelers. Istanbul: Kopernik.

Akyıldız, Ali. 2000. Refia Sultan: Mümin ve Müsrif Bir Padişah Kızı. Istanbul: Tarih Vakfı.

———. 2001. "Kadınefendi." In DİA, vol.24, 94-96.

———. 2017. Haremin Padişahı Valide Sultan: Harem'de Hayat ve Teşkilat. Istanbul: Timaş Yayınları.

———. 2019. Saray Harem ve Mahrem. Istanbul: Timaş Yayınları.

Ali, Syed Ameer. 1951. A short history of the Saracens. Karachi: National Book Foundation

Argıt, Betül İpsirli. 2017. Hayatlarının Çeşitli Safhalarında Harem-i Hümayun Cariyeleri 18. yüzyıl. Istanbul: Kitapyayınevi.

———. 2020 . Life After Harem: Female Palace Slaves, Patronage and the Imperial Ottoman Court. Cambridge: Cambridge University Press.

Brookes, Douglas Scott, ed. and trans. 2008. Concubine, the Princess, and the Teacher: Voices from the Ottoman Harem. Austin: University of Texas Press.

Eldem, Rothstein. 2018. "The harem as seen by Prince Salahaddin Efendi（1861-1915). Searching for women in male-authored documentation." Clio.Women, Gender, History 48:29-54

Lewis, Reina. 2004. Rethinking Orientalism: Women, Travel and the Ottoman Harem.

London: I.B.Tauris.
Osmanoğlu, Ayşe. 2016. Baban Sultan Abdülhamid. 9th ed. Istanbul: Timaş Yayınları (Orig. pub. 1956)
Peirce, Leslie P. 1993. The Imperial Harem: Women and Sovereignty in the Ottoman Empire. Oxford: Oxford University Press.
———. 2017. Empress of the East: How a European Slave Girl Became Queen of the Ottoman Empire. New York: Basic Books. 9
Penzer, N. M. 1937. The Harem: An Account of the Institution as it existed in the Palace of the Turkish Sultans with a History of the Grand Seraglio from its Foundation to the Present Time. Philadelphia: J. B. Lippincotto Company.（N.M.ペンザー、岩永博訳 1992.『トプカプ宮殿の光と影』法政大学出版局）
Saz, Leyla. 2010. Harem-I Humayun ve Sultan Sarayları (Orig.pub.1924)
Toledano, Ehud R. 1982. The Ottoman Slave Trade and its Suppression, 1840-1890. Princeton: Princeton University Press.
———. 1998. Slavery and Abolition in the Ottoman Middle East. Seattle: University of Washington Press
Uluçay, M. Çağatay. 1950. Osmanlı Saltanlarına Aşk Mektepleri. Istanbul: Türk Dünyası Mecmuası.
———. 1980. Padişahın Kadınları ve Kızları. Ankara: TTK.
———. 2017. Harem II. Istanbul: Ötüken Neşriyat (Orig. pub. 1971).
Ünüvar, Safiye. 1964. Saray Hatıralarım. Istanbul: Cağaloğlu.
Uzunçarşılı, İsmail Hakkı. 1988. Osmanlı Devletinin Saray Teşkilâtı. Ankara: TTK (Org. pub. 1945).
Zilfi, Madeline C. 2012. Women and Slavery in the Late Ottoman Empire. Cambridge: Cambridge University Press (Org. pub. 2010).

小笠原弘幸 2018.『オスマン帝国』中公新書.
クルーティエ, アレヴ・リトル 1991.『ハーレム――ヴェールに隠された世界』篠原勝訳, 河出書房新社（原著1989).
後藤裕加子 2019.「サファヴィー朝宮廷の女性たち――近世イスラーム王朝女性史研究の展望」『お茶の水史学』62号, 215-28頁.
清水和裕 2015.『イスラーム史のなかの奴隷』山川出版社.
中田考 2014.『日亜対話クルアーン』中田香織, 下村佳州紀訳, 黎明イスラーム学術・文化振興会.

19世紀末マンチェスター・ソルフォード衛生協会による「家庭生活」の伝授 ―貧困女性への清潔、倹約、禁酒の奨励―

井口　由貴
人間環境学府　修士課程２年

1. 研究課題

19世紀イギリスにおいて「サニタリー」の改良に取り組んでいた女性慈善団体は、その活動として貧困者への訪問や衛生講義、娯楽の実践、倹

約を促すクラブ活動に取り組んでいたが、これまでの公衆衛生史の文脈においては、それらの活動のうち、訪問や講義のみが分析の対象とされてきた（プロカシュカ 1980、松浦 1993）。そこで、本研究では、マンチェスター・ソルフォード衛生協会の女性支部の活動に着目し、本支部が清潔、倹約、禁酒の奨励という目標のもとに進めていた訪問や衛生講義、娯楽の実践や倹約クラブなどをひとまとまりに分析することで、これらの取り組みを公衆衛生史の中に位置付けることを試みた。

2. 史料と方法

史料としては、主にマンチェスター・ソルフォード衛生協会の年次報告書（*Annual Report of the Committee of the Manchester and Salford Sanitary Association*）を用いた。

3. 分析結果

史料分析の結果、まず、マンチェスター・ソルフォード衛生協会の女性支部は、自身の「サニタリー」活動の中に清潔、倹約、禁酒の奨励活動を内包させながら、協会のジェントルマンが関心を向けていた地域課題との接続の中で、その具体的な取り組みとして、貧困者への訪問や衛生講義、娯楽の実践や倹約クラブ等を進めていたことが明らかとなった。また、女性支部のレディは、これらの活動を通じて、貧困女性に家庭管理者としての術を習慣化させ、レディの価値・規範に則った「家庭生活」の伝授を試みていたことが明らかとなった。

主要参考文献

Manchester and Salford Sanitary Association, *Annual Report of the Committee of the Manchester and Salford Sanitary Association,* Manchester, 1878-1891.

Cunningham, Hugh, *Leisure in the Industrial Revolution, c.1780-c.1880*.,Croom Helm,1980.

Prochaska,F.K. *Women and Philanthropy in Nineteenth-Century England*, Oxford University Press,1980.

松浦京子、「19世紀後半のイギリスにおける訪問衛生教育　―衛生思想に見る「家庭管理のあるべき姿」―」、『西洋史学』、第170号、1993年、18-35頁。

蜷川幸雄演出シェイクスピア劇における女性表象

管　如帆

芸術工学府　修士課程２年

1. 研究背景

シェイクスピアの女性像については、シェイクスピア原作のフェミニズムの視点からの分析が多く、蜷川幸雄のシェイクスピア演出については、演出理念や舞台の特徴からの分析が多い。しかし、蜷川幸雄のシェイクスピア演出における女性像に関する研究は少なく、演出における女性像の特徴とジェンダーの関係については明らかにされていない。そこで、本研究では、蜷川幸雄の上演資料、著作や劇評などを参考に、蜷川幸雄演出の女性像とジェンダーの関係性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

蜷川幸雄の演出資料、著作や劇評などをもとに、蜷川幸雄演出の女性像を女性役割や異性装の観点から分析する。また、演劇学、社会学、ジェンダー論などの理論に基づき、蜷川幸雄演出の女性像の特徴をまとめている。

3. 分析結果

蜷川幸雄は、原作の演出を変えず、シェイクスピア時代の女性像を再現しながら、舞台装置、俳優の衣装や仕草で現代を生きる女性の等身大の姿を提示している。また、異性装上演では、現代社会のトランスジェンダーの複雑化を反映し、性別を曖昧にする。蜷川幸雄は、現実と虚構が交錯する舞台で、観客を楽しませた後に、社会通念や固定観念を見直し、男女の権利の平等を主張し、ジェンダーに対する観客、社会、そして文化の意識を変えていく。

4. 参考文献

蜷川幸雄（著）, 木俣冬（構成）『身体的物語論』（徳間書店, 2018年）

秋島百合子『蜷川幸雄とシェークスピア』（角川書店, 2015年）

山口和世「シェイクスピアの臼マンス劇における母、妻、娘の表象――女性の身体とセクシュアリティー――」（三重県立看護大学紀要, 2000年）

スティーヴン・オーゲル著　岩崎宗治, 橋本惠訳『性を装う：シェイクスピア・異性装・ジェンダー』（名古屋大学出版会, 1999年）

伊藤公雄，　樹村みのり，　国信潤子『女性学・男性学: ジェンダー論入門』（有斐閣, 2002年）

浜名恵美「シェイクスピアとジェンダー：序説」（Studies in languages and cultures, 2001年）

山口和世「Macbethにおけるジェンダーとセクシュアリティ―男性性の確立と母性の排除」（三重県立看護大学紀要, 1998年）

ひとがた（人型　人形）から考える ジェンダーとデザイン

疋田　睦

芸術工学府　修士課程２年

寺尾　知華

芸術工学部　４年

1. 背景・目的

近年、性の多様性が認められつつあるが人型ピクトグラムや人形からは未だ性別によるステレオタイプがうかがえる。例えば、日本産業規格におけるピクトグラムは男女の差異が強調され、リカちゃん人形は非現実的な比率の体型が表現されている。そこで、ピクトグラムと人形の寸法を人体寸法として計測し、現実の平均体型と比べた際の差を分析する。それらを視覚的･体感的に表現し、日常で目にするものについて、ジェンダーの視点からステレオタイプやバイアスに関する気づきや思考を促す機会を提供する。

2. 方法

日本産業規格内の人型ピクトグラムと株式会社タカラトミー製リカちゃん人形（#Licca・LD-20やさしいパパ・LD-19きれいなママ）を計測し、

ヒューマンスケールで現実との差を分析する。それらをもとに、その差を体感できる以下3種類の表現物の作製、展示を行う。

（1）ピクトグラムとリカちゃん人形、平均の人のシルエットを寸法で比較するパネル表現（平均の人は、「AIST/HQL人体全身形状データベース 2003」[1] や文献[2) 3)] から作成）

（2）「AIST/HQL人体全身形状データベース 2003」からランダムに選択した7体の人とリカちゃん人形、ピクトグラムを人形サイズで比較する表現

（3）男女のピクトグラムと#Liccaの等身大パネルによる、来場者自身と比較する表現（等身大にした場合の#Liccaの腕、脚、腰、首のモデルも制作し、展示した。）

3. まとめ

「ひとがた」の計測を通し、肩幅やウエストに大きな差があることが分かったが、これらは利便性や商品コンセプトにおける表現であるものの、価値観が結びつくことにより、「社会的な像」として捉えられやすくなるのだと推測される。そのため、図記号やキャラクターにおいて、大きく外れた寸法を用いる場合、それが「象徴」や「理想」を示しているのではないということをユーザーに対して示すことも重要になり得る。また展示を通し、ジェンダーについて考えるきっかけを与えること、直接的な問題解決ではなく、その方法を思考する一歩を生むことができたと考えられる。

参考文献

1） 国立研究開発法人産業技術総合研究所 著作物, 管理責任者 河内まき子・持丸正明,“AIST/HQL人体全身形状データベース 2003”、管理番号 H18PRO-503.

2） A.ルーミス, やさしい人物画, マール社, 1976, p.18-19.

3） 日本室内意匠協会, インテリアデザイン技能検定公式テキスト, 日本教育訓練センター, 2017, p.6.

総称文と性差別
――総称文のどこが悪いのか

水谷　亮介

人文科学府　博士課程1年

1. 研究背景

近年、総称文の使用は差別・偏見を促すので倫理的に問題がある、との指摘が為されるようになってきた（和泉2018、Haslanger 2011）。総称文とは、some、many、all などの数量詞なしに、漠然と一般的な事柄を述べる文のことである。確かに、総称文の発話のなかには、差別・偏見を助長するという理由で道徳的に非難されるべきものがあるように思われる。例えば、「女性は感情的だ」「女性は会議を長引かせる」「黒人は暴力的だ」「イスラム教徒はテロリストだ」のような文がそれである。

しかし、こうした文の発話がなぜ悪いと言えるのかについて、説得力のある説明はこれまでに与えられてこなかったように思われる。そこで本研究は、ある種の総称文の発話がなぜ道徳的に悪いと言えるのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

主として言語哲学的な考察を、文献研究という形で行なうこととした。言語哲学とは、言葉の意味を分析する哲学の分野である。したがって本研究は、総称文の意味と、総称文の発話の（差別・偏見を助長するという）道徳的悪さとがどう関係しているかを考察するものである。

3. 考察

本研究では、総称文使用が道徳的に悪いものとなる場合には、少なくとも二種類あるという分析を提案した。正義に反する帰結を生むため道徳的に悪い場合と、慣習を持続化させるため道徳的に悪い場合との、二種類である。この私の分析では、道徳的に悪くない総称文まで悪いものと判定するといったことはないので、先行研究よりも説得力がある。

いずれの場合においても、総称文が道徳的な悪さを生み出すのは、「KはFだ。aはKだ。／∴aはFだ」という形式の推論を許すためである。総称文がこの種の推論を許すということは、表出主義的意味論によってうまく説明できるという分析も、本研究では提案した。

主要参考文献

和泉悠（2018）「総称文とセクシャルハラスメント」『哲学』2018巻、69号、32～43頁、日本哲学会。

倉田剛（2019）『日常世界を哲学する――存在論からのアプローチ』光文社新書。

Asher, Nicholas & Morreau, Michael（1995）. What Some Generic Sentences Mean. In Greg N. Carlson & Francis Jeffry Pelletier（eds.）, *The Generic Book*. University of Chicago Press. pp. 300–339.

Gibbard, Allan（2003）. *Thinking How to Live.* Harvard University Press.

Haslanger, Sally（2011）. Ideology, Generics, and Common Ground. In Charlotte Witt（ed.）, *Feminist Metaphysics*. Springer Verlag. pp. 179–207.

Leslie, Sarah-Jane（2008）. Generics: Cognition and Acquisition. *Philosophical Review* 117（1）: 1–47.

the Role of Foreign Language Effect on Ethical Judgement and its Gender Difference

JIN YIMENG

Graduate School of Systems Life Sciences
Integrated Doctoral Course 3rd year

1. Research Background

The linguistics research published by Keysar and his colleagues in 2012 suggests that less decision bias is happening when using a foreign language（FL）instead of native language（NL）. The exist of Foreign Language Effect（FLE）has been proposed on risk-taking and moral judgement. It might be explained as the use of a foreign language stunts emotional processing and eventually lead to a relatively rational decision（Caldwell-Harris, et al., 2009）. The current research aims to find evidence

of whether FLE affects ethical judgement on experiment proposals and whether there's gender difference happening.

2. Methods

16 healthy subjects (8 females, 8 males) with relatively sufficient English ability participated in the experiment. Experiment proposals (of human subject research) used in the current research were extracted from the stimuli sets of the research published by Wilson and his colleagues in 2014. Each of the subjects were asked to give evaluation on 200 experiment proposals (100 in NL, 100 in FL), by interacting with an experiment PC. The question for evaluation is "Should this experiment be allowed to run?", so that subjects could give a judgement on the ethicality of each proposal. The effect of different contents has been counterbalanced by grouping.

3. Result of Analysis

The main result found by this research can be concluded as:

1. FLE does exist in ethical judgement on experiment proposals. Less polarized judgement was given in FL than in NL, which could be explained as FL provides greater cognitive and emotional distance than NL.
2. Females tend to give more polarized response on ethical judgement than males do, but both genders are equally affected by FLE.
3. The longer time people spend in considering, the less polarized they are. But it only happens in FL but not in NL.
4. Better FL users tend to give more polarized ethical judgement in FL.

4. Reference

A. Costa, et al. (2014). 'Piensa' twice: On the foreign language effect in decision making. Cognition, 130, pp. 236-254, 10.1016/j.cognition.2013.11.010.

B. Keysar, et al. (2012). The foreign-language effect: Thinking in a foreign tongue reduces decision biases. Psychological Science, 23, 661–668.

C.L. Caldwell-Harris, et al. (2009). Emotion and lying in a non-native language. International Journal of Psychophysiology, 71, pp. 193-204, 10.1016/j.ijpsycho.2008.09.006.

T. Wilson, et al. (2014). Just think: The challenges of the disengaged mind. SCIENCE, 345 (6192), 75-77.

性別役割認識における ジェンダーギャップの現状について ―女性の就業への影響の視点から―

吉村　美路

人間環境学府　博士課程３年

1. 研究背景

本研究の目的は，女性の就業と性別役割認識の関係を検討することである。日本社会における出産・育児による離職は依然として妻に多く，第

１子出産を機に離職する女性の割合は46.9％となっている（内閣府，2018）。15 ～ 64歳の女性の就業率は2011年から10年間で10.3％の上昇を見せるも，非正規雇用者の割合が50.8％（男性は16.7％）と高く（総務省，2022），国際比較ではジェンダーギャップ指数156か国中120位（World Economic Forum，2021）である。

本助成金を活用し，以下の２つの研究を実施させて頂いた。ひとつは子どもを持つ女性を対象に（1）妻自身の就業状態への肯定・否定感情が夫婦関係にもたらす影響について，２つめに（2）雇用形態別の男女に抱く印象についての調査である。前者は妻の就業中断が起こりやすい子育て期は限られていることを前提に，後に妻が抱く就業に対する納得感（肯定・否定感情）と夫婦関係について検討する。後者は例えば，同じ「非正規雇用者」でも男性と女性では印象が異なるのか等を確認し，就業における男女の性別役割意識の現状ついて考察を行った。

2. 研究方法

研究１・２ともにインターネット調査会社にWebパネル調査を依頼した。研究１の質問紙には，永田（1997）による「コミュニケーション・スタイル（配偶者認知）」尺度に平山・柏木（2001）による「夫婦間コミュニケーション態度」尺度の第４因子“無視・回避”を加えた尺度を使用した。統計分析は妻の就業状態への納得感を軸とした多変量分散分析を実施した。研究２では佐藤・安田（2001）による「日本語版PANAS」を使用し，Kruskal-Wallis検定による被験者の就業状態別の相違を確認した後，男女の各就業状態に対する印象の違いについて検討している。

3. 結果

研究1の結果概要を述べる。夫婦関係について，自身の就業への不納得感を持つ女性ほど，夫の態度は批判的，無視・回避などネガティブであると認知し，夫は保護的，大人的，自由な子ども的態度であると認知した妻ほど，現在の就業状態への納得感も高いことが示された。総じて，妻の就業状態への納得感（雇用状態に関わらず）と比例して，夫婦関係に正負の相違を生み出していることが明らかとなった。続いて研究２の結果概要を述べる。就業状態別男女の印象について，ポジティブかネガティブか調査した。被験者の雇用形態によって有意差が確認されたのは，性別役割認識が過渡期と考えられる専業主婦・専業主夫，そして男性の非正規雇用者（子どもの有無に関係なく）であった。一方で，同じ非正規雇用でも対象が女性の場合，印象はどの雇用属性の人も抱く印象は一貫して差がないことが示された。

・主要引用文献

佐藤徳・安田朝子（2001）日本語版PANASの作　成 Development of the Japanese version of Positive and Negative Affect Schedule（PANAS）scales性格心理学研究 2001第９巻第２号138-139.

総務省統計局（2022）労働力調査（基本集計）第１就業状態の動向　.https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/pdf/index1.pdf（2022年２月10日）

内閣府男女共同参画（2018）「第１子出産前後の女性の継続就業率」及び出産・育児と女性の就業状況について http://wwwa.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k_45/pdf/

s1.pdf（2021年12月10日）
永田忠夫（1997）夫婦間システムにおけるコミュニケーション行動測定尺度の作成 コミュニケーション・スタイルとコミュニケーション・スキル　愛知淑徳短期大学研究紀要　第36号.
平山順子 柏木惠子（2001）中年期夫婦のコミュニケーション態度夫と妻は異なるか？ 発達心理学研究2001第12巻第3号216-227
World Economic Forum（2021）Global Gender Gap Report 2021.https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2021.pdf.（2022年2月11日）